

現代の学校教育の意義に関する一考察

原 忠雄

1. まえがき

本稿は、筆者が本学「教育学演習」を担当するにあたり、本科目内容に関する論点「学校教育の意義」に関して、インタビューを受けて回答した記録をもとに構成している。以下、「Q」はインタビュアーの質問やコメントであり、「A」が筆者の回答である。

2. 人間関係を基盤とした学校教育

Q：それではよろしくお願ひしたいと思います。最初に原先生、学校教育の意義ということでお話いただければと思いますので、よろしくお願ひいたします。

A：よろしくお願ひします。そうですね、まず学校教育の意義、教育の目的っていうんでしょうかね。それは、一人一人の国民の人間形成っていうことと、その後、将来、国家社会の形成者の育成ということ、文科省でもうたっておりますけれども、これは、現代においては大きく変わらないだろうというふうに思っております。

幼稚園から小学校、中学校、高校、大学と学生、子どもたちは各教育機関で学んでいくわけですが、それぞれの教育を受ける中で、「生きる力」を身に付けていくということですね。各学校がそれぞれの段階で「生きる力」、言い換えれば今後の社会の中におい

て生きていく中で、より良い生活、より良く生きるための、いろいろな力を身に付けていくということになるというふうに思うんですけどもね。

ですからやっぱり学校としては、もちろんいろいろな事象の知識を学ばせることを、つまり知識、理解ですね。理解力を学ばせることはあるんですけど、いわゆる学校教育の基盤はどの学校においても、将来的なことを考えると、人間関係というものが一番大事になってくるだろうと思います。やっぱり学校運営、学校経営の一番の基本には、「生きる力」、それから言い換えれば人権教育というんでしょうかね、人との関わり、より良い関わり方といったものを基盤とした教育を、進めていく必要があると強く感じておりますけれども。

Q：人間関係を基盤にということですが、それも、それは同時にやはりより良い人間関係を築いていけることも、また目的といいましょうか、意義にもなるんですか。

A：そうですね。やはりそのところが一番、子どもたちに身に付けさせていきたいところではないかと。要するに、いろんな活動において、そのことが十分に身に付くことができなければ、いろいろ活動に支障が出ると思いますか、十分な成果が得られないのではないかと、というふうには考えております。

Q：ではやはり、人間関係の構築とは手段であり目的でもあるということですか。

A：そうですね。ですから全ての学校教育活動は、それらを基盤にして展開されるべきだろうというふうに思いますね。いくら高度な知識を身に付けさせようとしても、やはり人間関係、友達同士の関係、より良い関係がなければ、学習そのものも楽しくないでしょうし、身に付かないということになるのではないかと思います。

3. 「生きる力」について

Q：ところで、「生きる力」というキーワードについてですが、研修等々では学校現場でももちろん使われると思いますけれども、学校現場で普段使われますか、言葉として。

A：大きな学校経営計画とかのねらいの中では、あるいは学習指導要領はもちろん使用されますが、小学校なら小学校、中学校なら中学校で下ろしてきて、それをどのように身に付けさせていくかということ、各教科とか活動で狙っているわけなんですけれども、普段はやはりなかなか使用されないかもしれません。「生きる力」という言葉が現場そのもので出てくるというのは、少ないですね。

Q：しかしながら、恐らく学級目標、学年の目標、学校の目標、こういったことを段階を上げていって、その学校の目標の根拠や意味を考えると、「生きる力」にやはり行き着くということでしょうか。

A：そうですね。最終的には、やはり身に付けるべきものというふうに先ほど言いましたように、より良く生きる、より良く生活していく、そういった力を身に付けるということで、その言葉に代えられるのではないかと

と思います。

Q：普段あまり使われないでしょうけれども、その「生きる力」を育成するということについて、先生のご経験でこの学校では「生きる力」を育成するのに、例えばこういう行事が役立ったとか、こういう授業の方針とか、何かそういうご記憶にあることはございますか。

A：そうですね。全ての活動が先ほど言った実践教育を基盤にしたというところで、全てがそこに結び付いてると思うんですけども、指導者としての経験として、人権教育でいろいろ研究をしたことがあるんですけども。人権教育といってもいろいろな問題がありますけれども、その中で、人とのより良い関わりっていうんでしょうか、自分を大事にするとともに、人も大事にしていくというようなことなんですよ。そういうことを研究しながら、それをベースにした授業のあり方を研究したんですけども、そんな中でやはり、まずは人間関係、より良い人間関係づくりというもの、それをどの教科においてもどの活動においても、ねらいの大きな1つとして据えてきたと思うんですよ。

Q：どの活動においても。

A：ええ、どの活動においてもですね。ですから、全ての教科の教科指導の中で、それをねらっているということではないかと思うんですよ。ですから国語科を通して、社会科を通して、または理科を通して、教育実践を見据えているということでしょうか。ですから、特段これということではないんですけど、全ての教育で常にそこは指導者として頭に置いて、念頭に置いて教育活動を進めなければいけないというところは、かなり刷り込まれたような気がするんですよ。

Q：原先生、校長先生とか、もしくはその前の段階とかで、学校もかなり管理職になられてから、そうですね、その「生きる力」ということとか人権教育ということとかにいまひとつ何ていうんでしょうね、明るくないといいましようか、そういう先生とかに、若い先生もそうかもしれませんけど、あるいは年配の先生でも明るくない先生がいらっしやった、そういうご記憶ございますか。

A：そうですね、やはりさっき言った人の気持ちを考えると、自分の気持ちをうまく分かってもらってということの、やっぱり経験なんでしょうかね。それは確かに感じたことはありますね。ですから、指導者でもやはり子どものことを、子どもの気持ちになってとよく言うんですけど、本当にどれだけ子どもの気持ちをくみ取れるかっていうところは、やはりその先生の指導の中に出てきてしまうっていうところは、確かにありますね。

Q：やっぱり経験の長い短いというのもありますか、それとも。

A：長い短いもある程度あると思うんですけど、ですから例えば俗に言う先輩、年配の方、ベテランが長けているとは必ずしも言えないと思うんですね。ざっくりばらんに、例えば年配の先生でもやはり子どもたちの前で、指導というか何というか、形をつくるために子どもたちの気持ちがちょっと無視されていたりとか、強制的になっていってしまうとか、よく学級王国という言葉がありますけど、自分のペースにはめようとしてしまって、全ての子どもたちの気持ちが十分受け取れない、くみ取れないっていうところは少なくはないですけどね。

逆に若くても人間性、これまでの育ちの中で子どもたちの気持ちをすごく受け止めるのが上手な、もちろん男女問わずそういう先生

も、もちろんいますしね。そういう学級はやっぱ、子どもたちにも活力があるというのは言えるんじゃないかなと思いますね。

ですからそんな中で、先生も子どもたちにいろんな、素直に1人の人間としていろんなことを出せるし、そうすると子どもたちも自分たちの気持ちを言えるし、子どもたち同士も心を開けるっていうんでしょうかね。そういった雰囲気になりますので、とてもいいクラス経営、学級経営の基盤ができてくるっていうことになるんじゃないかと思うんです。

4. 学校の意義に関する社会の受け止め方

Q：学校教育の意義はそう簡単には時代とともに変わるわけではないと思いますが、一方で、この意義についての社会の受け止め方であったり、家庭の問題、地域の問題というもののについて、少し伺いできますか。

A：そうですね。ですからいろいろやらないといけないということで、いろんなアンケートが取られたり、地域の方々のアンケートは学校でももちろん、学校評価ってということで取ったり、一般的なところでの、学校に対する思いっていうんでしょうかね。現状の学校教育がどうだっていうようなアンケートを取られておられますけれどもね。その一つの例として、例えば大きく捉えて、現在の日本の教育についてどう思いますか、という一つの設問例があるんですけども、「良い」という回答はほとんどないんですね（笑）。

まあこれあくまでも一つの例ですけど、おおむね良いというのが11%ぐらい。改善が必要が42～43%ですね。それから危機感を感じてるのが半分近く、46%ぐらいあるわけですね。そんなような状況で、やっぱり学校に対する思いっていうのは、かなり不安なところが出てきてるっていうのはあるんじゃないかなというふうに思いますよね。

その不安の問題点ですかね、原因は何なのかということの1つとして、「公教育への信頼感」という言葉が出てきますね。それから「教育の質の低下」という言葉がやっぱり出てきますね。やはり皆さん、今の保護者の方々もかなり教育に関する知識、思いを持っていらっしゃると思いますんで、そういう要望から見えてくるのが現在の状況ということなんだろうと思いますけどもね。

その1つにやっぱり、「ゆとり教育」というものがありましたけれど、不十分さというんでしょうか、その反動というんでしょうか。それはかなり出てきますね。私もやはり今の親からそのちょっと上の方々の代に聞きますと、やはりまだまだゆとり時代とかゆとり教育時代とかということで、その時代の子どもたちなんだ、とかいうようなことで話がされますんでね。そんなこともやはり教育の問題点の1つになってるのかなと思うんですけどもね。まだちょっとしこりとして残ってるのかなというところもありますね。

Q：それはどのようなアンケートですか。

A：これは、産業構造審議会基本政策部会という資料からのお話です。もっといろんなアンケートはあるんでしょうけども。それから、学力低下についての言及がよくあります。学校では学習状況調査とか学力検査、昔でいえば学力検査ですね。そういうことへの影響ですよね、低下したというようなこと。また体力低下ということもあります。これは学校だけの問題ではありませんけれども。そういったことへの保護者の不安、危機感があるのかなというふうに思いますけれどもね。

Q：あとは社会の変化というファクターとしてはどのようなことが考えられますか。

A：そうですね。これも先ほどの教師の力量の

問題に関わってしまうんですけど、やっぱり教師の質、あるいは資質と言うべきでしょうかね。それに対する不安を指摘する声もあるということですよ。ですからやっぱり、社会、親、保護者の要望にどれだけ教師が応えられているのかっていうところかなというふうに思うんですけどもね。教師っていうか学校そのものでしょうかね。

5. 保護者の変化の背景

Q：保護者の要望というものは、20年～30年で見たときに、一定ですか、変わってきますか。

A：これはかなり変わってきてると思いますね。というのはやはり、かなり長いスパンで考えた場合ですけども、保護者は、今の時代からいうと例えば共働き、お父さんも働いている、お母さんも働いているという状況で、なかなか子どもたちに十分な関わり方ができないところから、家庭での教育っていうんですかね。子どもと過ごす時間の中での家庭での教育っていうのが、さまざまになってるんじゃないかなと思われます。昔に比べて。

それから時間的にも非常に少ないっていうこともあるでしょうし、その分学校の教育というものに、下手するとしつけの部分から、学校以前に身に付けるべきしつけの部分ですとか技能の面ですとか、そういったことも要求されることがありますね。

それから、学校のカリキュラム以外のところでですね。個人的な子どもの成長への要望のようなことへの要求が多くなってるんじゃないかなというふうに思うんですけどもね(笑)。

Q：例えば、どのような要求のことをイメージすればよろしいでしょうか。

A：はい、そうですね。私もいろいろ、教育委員会時代にもいろいろあったんですけど、例としてあまり良くないのかもしれないけれど、例えば、学習そのものの流れとかそういうことよりも、一つ思い出されるのは掃除についてですね。掃除、学校としては掃除というのは一つの清掃指導ということで、みんなで協力して自分たちの学習する、生活する環境をより良くしていこうということが狙いで、みんなで協力してやるわけですけども、やはり保護者の価値観によっては、掃除をさせてくれるなということが出てきてまして、なぜかと聞きますと、掃除というのは罰だろうということなんですね。

よく聞きますと、やっぱり日本ではなく、海外の国においては清掃そのものは業者がやり、子どもたちにやらせるものではない。やらせるとすると罰としてやらせていると。そういうような保護者の考えがあれば、清掃活動は罰として見えてしまうんだろうというようになことでしたね。そんなのもちょっとありましたね。

Q：なるほど。学校教育の意義というところに戻って来ると思うんですけども、やっぱり掃除も、やっぱり生きる力につながっているということでしょうか。

A：そうですね、やはりこれはもう当然、自分たちの生活するところ、単にゴミを拾う、きれいにするっていうだけではなくて、それがやっぱり学習する環境、生活する環境、子どもたちの気持ちってうんでしょうかね、心理的環境にも影響してくるだろうというふうに思いますしね。

Q：ところで、現在の子どもは自宅でお手伝いとかお掃除とかって、どうしているんでしょうね。

A：そうですね。よく夏休みに「家のお手伝いをしよう」という言葉がよく使われましたけど、私は「家のお手伝い」という言葉、使わないようにしたんですね。職員にも言ってきました。家での一員ですね。お父さんお母さん、おじいちゃんおばあちゃんもいるでしょうけど、きょうだいもいてっていう中で、その中で小学生でも中学生でも、家で自分もやっぱり一緒に生活している中で何か頼まれたとする。新聞を取りにいくとか、ちょっとした買い物に行くとか、掃除をするとか食器を洗うとか、洗濯するとかお風呂を洗うとかいろいろあると思うんですけども、それはやっぱり自分も関わってるわけですから、「お手伝い」ではなくて、自分の家庭での「仕事」の1つ、「分担」の1つというふうに、ぜひうちの人たちも考えてください、という話をしましたけれどもね。「お手伝い」というと、やっぱりなんか「やってあげてる」という感じになってしまうので。

Q：場合によってはお小遣いをあげる、あるいは子どもが要求するということもあるのではないのでしょうか。

A：はい。お小遣いくれるとか、何か買ってくれるとかいうことじゃなくて、やっぱり自分の家庭でやるべき、自分の家庭での仕事っていうんでしょうかね。というふうに捉えてほしいなと思いましたけどね。

Q：なるほど。ちょっと話が逸れますが、私の娘も「お手伝い」したら「お金ちょうだい」などと言い始めてるんですけど、それは絶対駄目って言って聞かせているところでした。

A：そうですね（笑）。お父さんお母さんが自分のうちの仕事をしていた、それを大変そうだから自分が自らちょっと手伝ってあげるっていうか、一部をやってあげるっていうこと

に、お手伝いという言葉を使うかもしれませんが、いろんな活動は全て、子どもは子どもなりの自分の家での仕事、役割分担の中の1つということで捉えさせていったほうがいいんじゃないかなと思うんですけどもね。

Q：そうかもしれないですね。今の家の現代的な家庭の家事って、やはり減ってますよね。

A：そうですね。やっぱり便利になっているっていうところがあると思うんですよね。やはり世の中、社会っていうのは、家庭の中のいろんな電気製品にしてもいろんな物にしても、人間ができるだけ楽できるような物っていうのを目指してるわけですよね。それはそれで活用すべきなんだろうと思うけれども、やはり基本的なことがまずできて、それを使うということが大事なんだろうと思いますし、学校はそこの部分を教えるところですよ。例えば、電卓の授業もありますけども、まず自分なりに計算ができるという力を身に付けて、さらに電卓を使うということをすればいいんじゃないかと思いますが、最初から電卓覚えたら、計算の力、考える力が身に付かなくなってしまうんですけどね。

Q：やはり学校教育の意義にまた立ち戻りますけど、ある程度歴史をちょっと前から振り返らせて、現代に到達させるという意義があるのでしょうか。

A：そうですね。やはり自分たちの生活を振り返る。今ある、今の便利な生活、当たり前前に生活してる物が、例えば大昔からでもいいし、戦前とか戦時中ではどうだったのか、といったこともしっかりと認識をさせて、その上で今があるんだという、人間の生活の変遷と人間の努力というところを学ぶべきだと思うんですけどもね。

Q：今の家庭では、あまり床を雑巾掛けなどしないですね。クイックルワイパーででしょうか。

A：そうですね、掃除機ですとかね。学校でも実際、掃除機はあることはありますけど、掃除機はほとんど学校で使いませんね。ましてや座敷ぼうきっていうんでしょうか、ああいった物は子どもたち使えないですよね、ちりとりも。集められないですし、家ではまず今ないと思うんですよね。庭なんかでちょっと使うかもしれませんが。あと自在ぼうきってやつですね、ブラシが付いてるやつですね。あれもほとんど家では使わないんだろうと思いますし、家ではほとんどクリーナー、電気クリーナー、掃除機でしょうからね。

Q：雑巾を絞ったりとかもしないでしょうか。

A：そうですね。ほとんど使わないんだと思いますよね。ちょっと机の上拭くとかそれぐらいはやるかもしれませんが、床を拭くなんてことは今まずないでしょうし。私も、ちょっと前の話になりますけど、1年生の保護者をお願いして、雑巾を作ってきてもらいますと、今雑巾も安く売ってるんですね。昔はおうちの人が作ってっていうのがもう、そういう光景が当たり前でしたけど、今安く売ってますし、それを持ってくるんですけど、子どもが持ってきて雑巾を使おうとしないんですね。「なんで使わないの」と聞くと「汚れるから」というわけですね(笑)。それでももちろん絞るっていう動作っていうんでしょうかね。あれをやったことがないようで、なかなか手で絞るっていうことができないですね。そういうのは確かにありますよね。

ですから、よく宿泊体験とかで宿泊活動、4年生以上であるんですけども、そんな中でもやはり、部屋の掃除、自在ぼうきで掃除するとか、それから布団を敷くっていうのはなかなかできないですね。シーツをきちんとた

たんでしまおうとか敷くとか、布団を三つ折りにして押し入れに入れるなんてことはほとんど経験ないみたいで、もうベッドとベッドシーツだけでしょうからね。

お風呂の入り方なんて、もう銭湯なんかにはほとんど行かないでしょうし、温泉とかちょっとたまに行くかもしれないけど、銭湯の入り方とかそういうのを見ると、現代の子どもなんだなと思いますけどね（笑）。

6. 地域と学校の関係性の変化

Q：では、ほかにも学校教育の意義と関わって社会の変化で思い当たることはございますか。

A：そうですね。やはり地域の形というんでしょうか。やはり学校というのは、昔はおらが村の学校ということで、地域の中の学校、そのことは今でも変わらないと思うんですけど、地域との関わり、地域との共同で子どもたちを育てていくというところが、なかなか目に見えてなくなってきたところがあると思いますね。地域といってもいろいろありますけど、特に新しい地域っていうのは、その地域に住まわれている方々自体が、お互いに知り合っていないというところがありますのでね。だからこの誰かも分からない、顔もそんなに知らない、もちろん名前も知らないというような中で、学校と共同してというのはなかなか難しいところはありますですね。

ですからその辺をやっぱり、もちろん地域の代表の方々と学校とは、十分に連携するための話し合いみたいな組織を持って、社会の教育力のあり方を考えていかなきゃいけないと思いますし、学校自体も地域の方々の教育力を使わせていただくべきだと思います。人材にしてもいろんな施設にしても、そのような取り組みの必要があるのではないかと思いますね。

そんな中で、子どもたちと地域の方々が知

り合う、交流ができたり、知り合うことがかなり必要になってくると思うんですけどもね。地域っていうのは家庭も含めてっていうことですけどもね。

Q：私はもともと、横浜市ではない所から引越してきましたんですが、地域の方と知り合うのは、むしろ子どもを通してですね。

A：そうですね。ただ、今もう親も一見つながっているように見えるんですが。情報もすごく早いわけですね、学校の情報なんかも。ある意味便利なんですよ。スマホなどで情報がパンといく。それはいいんですけど、逆に親もそこでのつながりだけで済ませてしまっただけで、顔を見て話すとか人間同士が集まって、昔という井戸端会議とかそういう感じではないような気がしますよね。

Q：PTAの形も地域によって異なりますか。

A：そうですね。学校にとってはPTAって組織はとても大きいと思うんですよ。PTAっていうのはやっぱり、保護者の一つの組織ですから、もちろんあるところもないところもあるんですけど、そこでの共同の重要性は、僕はすごく感じましたし、PTA活動と学校活動がうまく連携できると学校としてもやりやすかったですし、PTAとしても学校のことが分かるということで、一緒に子どもたちの教育に携わっているということを実感できると思います。その辺の関係がうまくいくと、とても子どもたちの教育がうまくいったなっていうところは経験しておりますね。やはり保護者の方々に理解していただけるっていう、一つの大きな手段、場所になりますのでね。

Q：地域の教育力が高いと、学校教育の意義も高まっていくと考えていいですか。

A：そうですね。そういう側面もあると思いますね。ですから、学校もやっぱり職員ももちろんいますけれど、地域のことを学ぶにはやはり地域の方々のお話ですとかご指導がとていいと思いますし、それから地域のいろいろな特性っていうのがありますよね。それはやはり地域の方々が一番知ってるわけで、教員がそれを聞きかじって教えてもちょっと違うのかなと思いますしね。だから学校の各教科等の中で、地域の方々の指導力はとても大きなものだと思いますし、もっともっと活用していくべきなのではないかと思いますね。

Q：地域が学校を支えるという意味でしょうか。

A：はい。だから学校も地域の教育力の一部という考え方をすべきかと思います。学校・家庭・地域という言葉もありますけど、地域があってその中に学校があるわけですので、地域の教育力の中の学校の教育力、家庭も含めて地域ですが、学校教育はその一部であるという考え方でいけるといいと思っています。

やはり本来は地域で子どもたちを育てていくわけですね。その中で、学校が教育課程、カリキュラムに基づいて教育を進めるわけですけど、その他いろいろな子どもたちの学びの場っていうのは、地域もあるし、もちろん家庭もありますし、そういったことをきちんと地域の方々も保護者の方々も認識していただけと、かなり子どもたちにとって良い学びの場になるのではないかと思いますけどね。自分たちの住んでいる所、全て学びの場であるという認識に立ってくれるのではないかなと思うんですけどもね。

Q：そういう意味では、新興住宅地とかあるいはマンション群の中の学校というのは、どのような難しさがありますか。

A：そうですね。正直新しい古いついていう地域

もあるかもしれませんが、やはり地域そのものが常にいろんな活動をしている、お祭をやっているとか、いろんな地域の活動ですね。ちょっとご年配の方が中心になるようなところが多いのですが、そういう方々の組織力があると、学校としてもその組織の中に入っていってお話すると、結構地域につながっていく、動きやすいというところがあるんですけどね。やはりそういうところがない、例えば新興住宅地であるとか、新しいマンションがたくさんあるというところは、なかなかその地域の方同士、保護者同士が気持ち、意識を一つにしていってということは伝わりにくいですし、なかなか難しいというように思うんですけどもね。

ですから、地域のいろんな活動で常に地域の方々が集まるお祭などは、地域の教育力が現れると思いますね。私も地域のお祭は、学校の管理職をやっていると行くんですけど、地域の方々がなんでお祭をやるかっていうと、ほとんどの方がやはり地域のまとまりをつくるためだと。人間関係をつくるためにお祭やってんだよというようなことを明確におっしゃいますね。人のつながりをつくっていくんだとかですね。宗教的なことなどもあるでしょうけれども、やっぱり人間関係づくり、上下の人間関係づくりとかということを強調されますね。だからそういうことがうまく活用されるべきではないかなと思うんですけどね。

Q：例えばハレの日の1つである運動会という場のあり方はどうですか。

A：そうですね。私が一番最初に行った学校では、子どもたちが紅白組はあるんですが、座るところが地域で座っておりました（笑）。お弁当も当然その地域で食べるんですけど、地域対抗リレーですとか、それから地域での例えば大玉割り、くす割り、玉割りです

かね。そんなのもありましたね。そこはとても印象に残ってます。学校の運動会がまさに地域の運動会になっているというところでしたね。

今、災害に対してもそうだと思うんですが、やはり地域の団結力がいろんなところで必要になってくると思うんです。大きな災害があったときも、やはり子どもたちも、年配まで含めて、それぞれがしっかりとした認識を持って対応していくというところは、かなり復興にも大きな力になってるようですけどもね。

Q：片や新興住宅地とかマンション群の中に学校がある場合は、むしろ学校が地域をつくるという側面もあるのでしょうか。

A：そうですね、確かにそれを努力しなければならぬというところはありますね。やはり学校にも説明責任がありますのでね。この学校のこの地域の子どもたちを、このように育てていきますので、ぜひいろんな意味でのご協力をいただきたい、という広報活動のようなものはかなり必要だと思いますね。学校がまず先に立って、地域の方々へ投げかけていって、できるだけ学校に目を向けていただくというようなことは必要なところもあると思いますね。

7. 時代の変化と学校教育の意義

Q：学校教育の意義ということをテーマに話していただけてますけれども、社会が変化していく中で、これから何十年何百年先をイメージするのは難しくても、10年後15年後をイメージする中で、学校教育の意義はどのように求められていくのでしょうか。あるいは、どのようになっていったほしいと思われませんか。

A：そうですね。子どもの数が減っているということもありますし、家庭の教育力、地域の教育力の変化ということもお話してきたのですが、その流れはもう変わらないと思うんですね。だから基本的にはやはり、家庭を含んだ地域との十分な連携を基にした学校教育のあり方を模索していく必要があると思います。

学校への要望、教育への多様なニーズなどが増えれば増えるほど、学校だけでは全て関われなくなってきますので、例えば学校教育の範疇、地域の教育の範疇、家庭の教育の範疇っていうものをそれぞれ明確にして、役割分担をして、さらに共同しながら子どもたちを皆で育てていくということが大きな理想であるところは、大きくは変わっていかないと思います。

また、逆に、先ほど触れた地域の結束力や家庭の教育力の必要性をいろいろな立場から呼びかけていって、子どもたちのために活動していくことが必要だと思いますけどもね。

Q：ありがとうございます。やはり地域、家庭、学校というトライアングルの重要性については変わらないということですね。

A：そうですね。それはもう変わらないものだと思います。

8. 学校段階と学校教育の意義

一まとめに代えて

Q：さて、お話ししていただいたのは、学校教育といっても、どちらかと言うと小学校・中学校のイメージが私には浮かんでるんですが、高校になるとまた異なってくるのでしょうか。

A：そうですね。

Q：まず、地域が広くなるっていう部分があり

ますね。

A：はい，そうですね。ですからそれも，地域も広くなるっていうのは，やはり高校生，大学生となれば，当然地域からかなり離れた，もっと全体，日本全体を考えるようなことも含めて指導してかなければならないとも思いますし，いわゆる中学生としての地域での役割，高校生としての地域や日本，そういう社会への関わり方を考えさせていく必要があるだろうと思います。

ですから，上にいけばいくほど，さらに社会の一個人，社会の一員として何をやってくべきか，どのように関わっていくべきかという認識を強めさせるような教育のあり方が求められるかと思います。それは学校教育だけでなく，地域もそうですし家庭もそうだと思うんですけど，そういったところをかなり強調していく必要があると思うんですけどね。

Q：家庭に所属し，地域に所属して，学校に所属する。その範囲がだんだん学校段階が上がるに従って大きくなるということですね。

A：そうですね。やはり，中学生にもなると，学校の意義は「受験のための学校の勉強をするところ」みたいなイメージがあるかもしれませんが，それも確かに大事なんでしょうが，やはり学ぶ一番の基本はそこにあると思います。ましてや義務教育ではない高校では，自分の将来をつくっていくという意識を持って，そのためのいろんな学びをしていくという認識を指導していく必要があると思います。

Q：なるほど。ここまで学校教育の意義についてお話いただきましたが，何か言い残されたことございませんか。

A：そうですね。当然のことですが，学校全体

で取り組む一番元になる学習指導要領についてです。それを構築していく日本の行政がやはり，いかに日本の実態を把握して，いろんな専門家なりと，それから現場との十分な連携を取りながら，どのような教育を推進していくかということを考えていかねばならないと思います。学習指導要領は学校教育の一番の基になりますのでね。その辺はぶれないようにしてほしいなという気がします。やはり先を見据えて構築していくべきだと思うわけです。

Q：なるほど，最後に学習指導要領の話に入りかけましたが，今回はこのあたりまでとさせていただきます。ありがとうございました。